

# 和解による平和: 1945 年の米国の原爆投下を裁く民衆法廷

以下は原水爆禁止 2026 年世界大会国際会議におけるジョセフ・エサティエ氏の発言の全文です。

みなさん、ここに集まり、平和と被爆者のための正義について語ってくださったことを感謝します。また、土田弥生さんと原水協には、わたくしに、広島と長崎への合衆国の原爆投下の韓国の生存者への正義を求める新しい運動について話す機会を与えてくださったことを感謝します。私の名前は、ジョセフ・エサティエです。(難しい名前ですが、アルファベットの 4 文字、S-R-T-A を言ってくだされば、私の名前の発音になります。)

私は、名古屋の大学で近代日本文学の研究を行っているアメリカ人の学者です。また、私は、「ワールド・ビヨンド・ウォー (World BEYOND War)」という国際平和団体の日本支部の代表を務めています。私たちのグループは、「1945 年原爆投下に対する米国の責任を問い、韓国の犠牲者への賠償を確保するための国際民衆法廷」を支援するパートナーです。

この民衆法廷は 11 月にソウル市で開かれます。その主たる目的は正義です。私たちは、二つの原爆の投下の法的責任を米国に負わせることを目的とし、よって、二つの政府、すなわち大日本帝国の植民地支配と米国の原爆投下によって被害を受けた朝鮮の原爆被害者の人権を回復することを目指しています。この歴史を研究してきた多くの人々と同様に、私は、私たちの罪 (米国が広島に、特に長崎に対して行ったこと) は、人類に対して犯された最も許されざる罪の一つだと信じています。

この法廷を通じて米国の原爆投下の違法性を確立することによって、私たちは、すべての核の脅しと核兵器の使用が違法だと糾弾することを容易しようと考えています。今日、ロシアやイスラエルが核兵器に訴えることが懸念されるときに、核兵器の廃絶は、以前に増して、重要です。

この民衆法廷のもう一つの重要な目的は、核兵器保有国による核兵器の使用と脅しを正

当化する、いわゆる「核抑止論」に異議を申し立てることです。このことは朝鮮半島の非核化と核のない世界を実現することに貢献する可能性があります。

私たちが正義の為だけでなく平和のために働いていることは言うまでもありません。「正義なしに平和はない」とはよく言われていますが、また、こうも言えるでしょう「平和がなければ正義もない」と。アメリカン大学の歴史家であるピーター・カズニック教授は、1945年当時のアメリカの8人の五つ星将校のうちの7人が（ドワイト・D・アイゼンハワーやダグラスマッカーサーのような将軍を含み、また、ウィリアム・リーヒやチェスター・ニミツのような著名な提督を含み）のちに、原爆投下は軍事的に不必要か、あるいは道徳的に非難されるべき、または両方だったと述べていると、何度も強調してきました。



発言するジョセフ・エサティエ氏



## ジョセフ・エサティエ氏とジョセフ・ガーソン氏

それでも、ほとんどのアメリカ人は、原子爆弾の使用は、太平洋戦争を終わらせたのだから正当化されると教えられてきました。私たちはみんな、戦争を終わらせたのは、満州と他の植民地へのソ連の侵攻だったと知っています。ハリー・S・トルーマンは怪物でした。彼が行ったことは計り知れない重大犯罪でした。私たちは、81年経っても、トルーマンからバラク・オバマ、また、ドナルド・トランプまで、ただ一人の大統領も謝罪していないことに対して、怒りをおさめるべきではありません。

今日、核保有国がほかの核保有国に対し戦争を仕掛けている状況の世界において、この民衆法廷の重要性に思い至ってください。「核の冬」の危険性を覚えておきましょう。イギリスがウクライナによるロシア国内深く侵入した攻撃を支援していることを考慮すると、私たちすべての生命が危険にさらされていると言っても過言ではないでしょう。私たちは、核戦争の危険性を人々に思い出させなければなりません。私たちはみんな、韓国の人々が「ろうそく革命」のような非暴力の手段で、不正義に抵抗したことに対して感謝すべきです。民主主義や平和に対する彼らの非暴力の運動によって、私たちの安全が保たれています。

広島や長崎の原爆博物館で真実を聞くことは、多くのアメリカ人にとってとても衝撃的であり、涙があふれることがよくあります。残念なことではありますが、真実を知るためには、衝撃を受ける必要もあるのです。そうすれば、私たちアメリカ人、そして世界中の人々が学びます。この法廷を通して、核に関する多くの真実が明るみに出るでしょう。

日本の皆さまがご存じのように、村山富市首相は「戦後50周年の終戦記念日にあたって」と題する演説を行いました。その中で、彼は、日本が「国策を誤り」、「植民地支配と侵略によって」アジア諸国の人々に多大な被害と苦しみをもたらしたと述べました。そして、「痛切な反省の意」を表わし、自国の犯罪に対する「心からのお詫びの気持ち」を表明したのです。悲しいことに、アメリカにおいては、このような謝罪は、今なお想像することさえできない状況です。米国政府の高官が私たちの戦争犯罪について、公式に謝罪するということを期待するのは難しいのです。私たちは、それを想像できるものにしなければなりません。

みなさん、どうか、ご自分自身に尋ねてください。「米国を謝罪させるためには、どのような運動が必要なのでしょうか？」(アメリカ人の)私たちは、日本の公式謝罪のレベルに

も達していません。日本では謝罪と和解に一步を踏み出している政府高官がいます。アメリカは、多くの良質な反戦の映画や書籍を持っています。アメリカの平和活動家たちは、平和のための長く勤勉な努力を続けてきました。しかし、米国はいまだに次の段階に進んでいません。その段階とは、公式な謝罪についての国民的議論が行われるときです。自分の行ったことに対して謝罪することなしに、アメリカ人はどうやって前に進めるのでしょうか。謝罪するというのが、大日本帝国の残虐行為を正当化するものではないことはもちろんです。それは我々「愛するアメリカ」も残虐行為を犯したと述べるに過ぎないものです。11月の法廷で、アメリカの私たちにとって、そのことを言いやすくなるでしょう。

ハワード・ジン『爆弾』(The Bomb)という本を書きましたが、彼はある社会学者の言葉を引用しています。「目的を達するために、25万人もの人間を殺戮しようというときに、根本的に誠実・善良な人々は、どんなたぐいの気分になっていなければならないのだろうか、どんな道徳的しつらえがされなければならないのか？」ジンは以下のように答えています。「『根本的に誠実・善良な人々』という言葉は考えに入れないようにしよう。アメリカ人が、他国の人たちよりもこの言葉に値するのか？ すべての残虐行為は、全人類共通の道徳性を狂わせるような状況に誘導させられたときに、『根本的に善良な人々』によって遂行されるのではないのか？」

この法廷は私たちに歴史の事実を思い出させ、世界中の人々が平和のために働くよう促すことになるでしょう。私たちは、私たちが朝鮮人や日本人、その他の人々に行ったことを学ぶことになるでしょう。核戦争勃発の現実的可能性が存在する今この時に、アメリカ人は、我が国が他国に対していかに悪行をなしてきたのかを認め、謝罪しなければなりません。この法廷から学ぶ人々の多くは、朝鮮半島から遠く離れた所に住み、何も知りません。

私たちの政府は、私たちを暗闇の中に置き、騙してきました。朝鮮の亡霊は日本国中に散らばっています。(ひどい苦痛の中で生きることを強いられ、若くして亡くなった朝鮮の人々の記憶です。)日本と米国という二つの帝国による暴力の犠牲者です。彼らのための正義は、彼らの為に、そして今日を生きる人々の為に、さらに未来に生きる人々の為に、平和と正義をもたらすことを進めるでしょう。

どうか、私たちとともに、民衆法廷を支援し参加してくださるようお願いします。

【日本語訳 安井倫子 日本 AALA 常任理事 / 大阪 AALA 事務局次長】